

## 小さな地域博物館の魅力を求めて —茨木市立文化財資料館の挑戦—

清水 邦彦\*

### 要 旨

数多くの博物館、そしてその大半が歴史系の博物館で占められている日本のなかで、小さな歴史系の地域博物館はどのようにしてその存在意義を高めていくべきか。筆者はその回答に、オンリーワンの魅力の創出を考える。そのような魅力の創出には、そのもととなるべきものが必要であり、それは地域への徹底的なこだわりをもった調査・研究と考える。本稿は、このように考える筆者が茨木市立文化財資料館でおこなった展示をもとに、茨木市立文化財資料館が目指す方向について紹介し、小規模な歴史系の地域博物館の一つのあり方を考えてみたい。

### キーワード

小規模博物館 地域博物館 歴史系博物館 調査・研究 展示

### 1. はじめに

小さな地域博物館の魅力は何か？

全国には大小様々な分野の博物館が存在するなか、その大半は歴史系、小規模な地域博物館である。そして、その多くは入館者数の確保に苦しんでいるのが実態ではなかろうか。

一方、大規模博物館では、全く異なる様子が見てとれる。例えば、東京国立博物館や国立科学博物館、正倉院展を開催中の奈良国立博物館には、大勢の人々が訪れる。また、歴史系の特別展（2015年度）に目を向けると、海外の優品を見ることができる「大英博物館展」、人気が高い戦国時代を扱った「大関ヶ原展」などにも、多くの来館者がいた。両者とも多くの人が知っている固有名詞を冠する特別展であり、数多くの優品が並んだ。このような大規模な展示、かつ誰もが知っている国宝級の資料の展示に集まる人々の数は、多くの人が博物館へ「知」を求めていることを証明している。

冒頭で述べたように、自分たちが住む身近な地域の歴史を扱っているにも関わらずに、地域の小規模な歴史系博物館に目を向けられることは少ない。

本稿はこのような状況のなか、5年間という短い期間

ながらも、茨木市立文化財資料館という小さな歴史系の地域博物館で働いてきた経験をもとに、小規模の歴史系地域博物館の存在意義、そしてその魅力について筆者なりの見解を述べることを目的とする。

### 2. 小規模地域博物館の魅力を求めて

#### 2.1. 資料と利用者を結ぶもの

どこの博物館においても、蓄積された資料が存在する。博物館は資料の収集・保管、調査・研究、普及・啓発を業務とする以上、その根本となる資料<sup>(註1)</sup>をいかに活用するのか、博物館の魅力はそこにかかっていると言っても過言ではない。

資料の活用の考え方について、黒沢浩の見解を以下に示し、参考にしたい（黒沢2014）。資料の活用を図ることができるのは、その資料（考古資料、文献史料、民俗資料、美術工芸品等）についての専門的知識をそなえた学芸員である。学芸員は自身が働く博物館が所蔵する資料に関して高い専門性を有しているはずであり、学芸員の役割はそれぞれのもつ専門性によって博物館が所蔵する学術資料と一般の利用者を結びつけることにほかならない。さらに、その結びつけは特定分野の研究の概説を

\*茨木市立文化財資料館

示すのではなく、学芸員自らの研究に立脚し、その面白さを知ってほしいというメンタリティをもつべきであるとする。

筆者もこの黒沢の見解に賛同する。自らの研究に基づき、収蔵資料を評価し、さらには資料と利用者を結びつけることは、調査・研究にオリジナリティがある以上、その結びつけにもオリジナリティがあり、独創性や目新しさを含んだ魅力あるものになる。

また、小規模な歴史系の地域博物館の場合、上記の点は次の点でも重要と考える。

まずは、ある特定地域（市町村レベルの面積）について時間をかけて徹底的に調査・研究できる人物は限られている点である。大学や研究機関に所属する研究者とは異なり、ある特定地域における資料の収集および調査・研究に労力を注ぐことができるのは、その地域博物館の学芸員や地方公共団体の専門職員等であろう。つまり、地域博物館に勤める学芸員は地域に精通し、その歴史や特徴を明らかにし、展示等で表現できる数少ない人物とも言える。だからこそ、地域に徹底的にこだわり、調査・研究をおこない、資料と利用者の結びつけを図っていく必要がある。

もう一つの重要な点は、調査・研究は予算的な影響を受けにくい点である。資料の科学分析など、必ずしもそうではない一面もあるが、調査・研究には予算を必ずしも多く必要としない。少なくともお金はかけずに研究することは可能である。

特別展を例にとると、大規模博物館の場合、多くの優品の借用および展示、出品資料に合わせた展示空間の構築、交通機関などでの広告など、多くの予算措置が可能である。一方で、小規模の地域博物館の場合、多くは市町村立であり予算が限られていることが多い。おそらく、多くの館が上記のような費用を負担できないだろう。

しかし、調査・研究については、上記のような館のハード面や予算的な制限を受けにくい。つまり、小規模な地域博物館でも大規模博物館と条件が対等に近いのは、調査・研究面ということが言える。

ただし、この点については、博物館の規模、環境、職員数の違い等による調査・研究時間の確保の問題があるという声もあるだろうし、実際のところ、それは否めないと筆者も考える。ただし、雑多の仕事のなかでも、調査・

研究を続けるという意思があれば、細々ながらも調査・研究を進めていくことは可能であり、予算やハード面といった個人ではどうにもできない問題とは異なる。日常業務において調査・研究に時間が割けるのは微々たるものかもしれないが、その積み重ねが博物館の所蔵資料を魅力的にし、ひいては博物館の魅力となる源となる。

## 2.2. 調査・研究と博物館の魅力

ここまで調査・研究が博物館の魅力にとって極めて重要であることを述べてきた。しかし、資料と利用者の結びつけをおこなう以上、調査・研究といっても自分の興味本意だけではなく、利用者や博物館の目的・存在意義を意識したうえでおこなう必要がある。後者については、小規模な歴史系の地域博物館の場合、その地域の歴史を主として扱う博物館である以上、前節でも述べたように、地域への徹底的なこだわりをもって資料の調査・研究をおこなう必要があるだろう。

では、前者については、どうだろうか。利用者が求めるものと調査・研究の接点について、考古学を事例に考えてみたい。

広瀬和雄は「日本考古学には、「もの」の個別形態論的研究こそが実証的な研究だという、多くの研究者の確信があるようだ。しかし、文化行政関係者をはじめ、多くの考古学研究者が、発掘調査の現地説明会や博物館・史跡公園などでの解説、あるいは講演会・シンポジウムなどで直面してきたように、人間の営為を媒介させた体系的な説明をしないと、いくら精緻な「もの」の研究を提示しても、国民には届かない。」と指摘する（広瀬 2008）。

筆者もこの指摘に賛同する。筆者も含め多くの専門家がそうであると思うが、同じ資料について話す場合においても、専門家を相手とする研究会と、一般の方々を対象とする講演会等では、用いるレジュメや話す内容を変えることが多い。前者の場合はモノの細かな話をしてもその情報もつ価値を理解してもらえ一方、後者の場合はモノの細かな話よりも、そのモノがどのように地域の歴史のなかで位置づけられるのかという点に関心が高い。資料館で働き始めた当初は、研究会で話す簡易版のような話をしたこともあるが、やはり利用者の反応は芳しくなく、いつしか研究者用と利用者用に使い分けるようになった。

広瀬の指摘を踏まえ、かつ筆者の経験を省みると、地域博物館においては、資料を地域の歴史叙述のなかに位置づける調査・研究が重要と考える<sup>(註2)</sup>。この作業を経ることによって、資料はいきいきと地域の歴史を利用者に垣間見せてくれる。そして、可能であれば、それをより広域の歴史に位置づけることが望まれる。例えば教科書に登場する人物や歴史との関連まで言及できるのであれば、興味・関心を抱く層は広がり、その地域博物館のより広域な魅力発信となりえる<sup>(註3)</sup>。

### 3. 茨木市立文化財資料館での実践

#### 3.1. 茨木市立文化財資料館の現状

上述してきたことを念頭におき、茨木市立文化財資料館に目をうつしてみよう<sup>(註4)</sup>。資料館は開館して31年になるが、従来考古学を専門とする学芸員で占められており、かつ埋蔵文化財センター的な性格を併せもつことから、収蔵資料の大半は考古資料が占めている。また、開発に伴う発掘調査によって常に新出の考古資料が蓄積されていく状態にある点も特徴であり、博物館の悩ましい課題の一つである資料の収集をクリアできていることになる。

資料館で収蔵している市内各地の考古資料をどのように評価し、地域史のなかに位置づけ、さらにはその面白さをどのように市民に伝えるのか。上述した資料館の現状と特質を鑑みれば、これが第一に茨木市立文化財資料館に求められていることと言えらる<sup>(註5)</sup>。

次節以降、前章の内容を意識しておこなった、茨木市立文化財資料館の展示を紹介したい。

#### 3.2. 「東奈良遺跡の青銅器製造

##### —銅鐸鑄型発見40周年記念—

2013年10月2日から12月2日にかけて、茨木市立文化財資料館でおこなった展示である。

経緯 茨木市立文化財資料館が位置する一帯は、東奈良遺跡にあたる。東奈良遺跡は三島地域のなかでも、弥生時代の大規模集落遺跡として著名であり、1973年から1974年にかけて数多くの鑄造関連資料が出土したことで知られている。とりわけ、第1号流水文銅鐸鑄型はほぼ完全な形を保って出土しており、現在でも日本列島唯一の事例である。これらの資料は弥生時代における鑄造技術を示す重要資料であることから、「撰津東奈良遺跡鎔

範関係遺物」として、国指定重要文化財に指定されている。これらの鑄型が見つかって40年を迎えることから、記念展示として開催することになった。

目的 展示の目的は、東奈良遺跡の青銅器鑄造を紹介し、東奈良遺跡の重要性、当時の鑄造技術について見識を深めてもらえることとした。

方法 まず、重要文化財に指定されている資料をすべて展示することを第一の方針とした。東奈良遺跡の資料はまとまった鑄造関係資料である一方で、銅鐸や銅戈、ガラス勾玉鑄型などの一部の資料のみが知られているのが現状であると感じていたからである。

次に、出土資料の再検討をおこなった。鑄造関係資料が出土してから40年の間に、様々な新出資料が出ており、現在の視点から出土資料を見ることで、新たな成果が期待できると考えたからである。その結果、埴塙もしくは取瓶と考えられる高坏状土製品、ガラス小玉鑄型の存在が明らかになり、展示することができた。また、過去の整理作業では、銅鐸を描いた絵画土器の存在が明らかとなっていた。明らかに銅鐸を描いた絵画土器としては全国初の事例となり、直接鑄造には関係ないものの、銅鐸を生産した集落で見つかった点は興味深いと考え、展示した。

最後に、東奈良遺跡の第1号流水文銅鐸鑄型に基づいた復元銅鐸の製作、および石製鑄型による鑄造実験を実施した。これらについては、難波洋三氏に監修をお願いした。復元銅鐸の製作では、桜ヶ丘銅鐸の成分分析の結果を参考に、当時と同じ成分比率で製作してもらうことで、製作当時の色や見た目を感じてもらえるようにした。また、石製鑄型を用いた鑄造実験は、銅鐸の鑄造そのものには失敗したが、失敗した製品や用いた鑄型などの道具の展示をおこない、当時の鑄造技術のレベルの高さを感じてもらえるように心がけた。

まとめ 東奈良遺跡で出土した鑄造関係遺物の全容を展示するとともに、新出資料の紹介、さらには復元銅鐸の展示、鑄造実験の実施およびその紹介をおこなうことで、単なる遺物を羅列した展示ではなく、展示の目的である東奈良遺跡の重要性への理解、学術的な情報発信、さらには当時の鑄造技術についても見識を深めてもらえるものとする展示にすることができたと考えている。

また、銅鐸絵画土器は確実な事例としては全国初であ

ることもあり、新聞各紙に採り上げられ、展示の広報にも大きく役立った。

### 3.2. 「茨木に眠る資料—免山篤コレクションを中心に—」

2014年10月16日から12月15日にかけて、茨木市立文化財資料館で開館30周年を記念しておこなった展示である。

経緯 茨木市で生まれ、生涯を過ごした故・免山篤のコレクションを一括して、文化財資料館で寄贈を受けており、その一部の公開を目的とした展示を計画した。免山は農業に勤しむかたわら、積極的に遺跡の踏査をおこない、その活動は茨木市を含む三島地域を中心としつつも、河内・和泉、さらには他府県にも及んでいる。免山が表採した資料のリストは6000を越し、そのなかには太田茶臼山古墳や今城塚古墳に埴輪を供給した新池埴輪製作遺跡の発見時の資料、安威1号墳の墳丘が崩落した際に発見された石製腕飾類など、学史的にも貴重な資料が数多く含まれている。また、表採した資料の紹介を『古代学研究』や『茨木市の文化財』などに寄稿しているものの、その多くは未公表の資料である。免山は1940年代から遺跡の踏査を始めており、早くからの開発によって失われた遺跡の情報を知ることができる資料も存在し、地域の歴史を復原していくうえでも、重要な資料群と言える。

また、資料のみならず、ノート、書籍、自身が撮影した写真類、新聞の切り抜きファイルなども一括して寄贈を受けており、免山篤という一郷土史家が何を考え、遺跡を踏査していたのかについても、考えていくことが可能なコレクションとなっている。

目的 展示の目的は、免山篤コレクションの公開、さらには免山篤という郷土史家について知ってもらえることとした。

方法 免山篤コレクションの資料数は膨大であることから、免山コレクションの一つの柱である古墳時代を主な対象とし、かつ茨木市を含む北摂地域の資料を展示の一つの大きな柱とした。これに加え、「東奈良遺跡と免山篤」、「郡古墳群とその周辺」、「福井の後期古墳」、「三島別業と中臣鎌足」と4つのサブテーマを設定した。それぞれのテーマに関連する免山篤コレクションの資料のみならず、文化財資料館でおこなっていた再整理や調査で明らかとなった資料、新たに寄託を受けた

資料等を展示した。具体的には、従来知られていなかった郡・上穂積古墳の出土状況図と副葬品、茨木ゴルフ場内窯跡の須恵器、海北塚古墳の金銅製品、青松塚古墳の須恵器、東奈良遺跡の埴<sup>(註6)</sup>である。これらは新出資料やあまり知られていない資料であり、北摂地域を考えると非常に重要な資料であり、免山篤コレクションと併せることで、より学術的な価値を展示にもたせることを意図した。さらには、免山篤について知ってもらえるように、氏の略歴や『古代学研究』に投稿した論考の原稿、論文を寄稿した雑誌なども展示した。

また、文化財資料館では従来、特別展ではパンフレットを刊行していたが、多くの新出資料を公開できること、そして展示を見ることが適わない人々にも、情報の共有ができるよう、簡易ではあるものの、茨木市立文化財資料館では初となる図録を刊行した。

まとめ 免山篤コレクションを中心として、多くの未公表資料を提示することで、学術的な価値を高めるとともに、免山篤について知ってもらえるよう心がけた。展示資料については、採集資料ということもあり破片が多いため、一般の利用者になぜその資料が重要なのかを示した説明パネルを多くしたが、良く言えば専門性が高い、悪く言えば若干マニアックな展示となった点は否めない。ただし、免山篤コレクションの初田1号墳の埴とともに展示した東奈良遺跡の埴は中臣鎌足の墓の可能性が指摘されている阿武山古墳と瓜二つで、大化の改新前に中臣鎌足が退去した「三嶋別業」の所在地に関係する可能性を秘めていることから、多くの新聞に採り上げられた。おかげで、展示の広報としても大きな効果を得ることができ、かつ、一般の利用者への興味・関心の喚起につながったことで、多くの入館者数につながった。

### 3.3. 「燃やされた墓—上寺山古墳里帰り展—」

2015年8月6日から9月28日にかけて、茨木市立文化財資料館の1階ロビーでおこなった展示である。

経緯 企画の背景としては、1961年に調査された上寺山古墳の出土資料を、筆者を含む有志（上寺山古墳研究会）で整理中であったことによる。

上寺山古墳は調査後、概略の報告（田代1972）がなされたのみで、正式な報告書は未刊行であった。しかし、上寺山古墳は水野正好がこの調査を経て、森浩一による古墳時代への火葬の遡上説を否定、また田代克己がその

概略報告のなかで初めて横穴式木室の復元図を提示するなど、古墳時代における横穴式木室および「火葬」の研究の起点となった学史的には著名な古墳である。上寺山古墳の正式な調査報告は日本列島における横穴式木室や古墳時代の「火葬」を考えるうえでも、重要と言える。

目的 過去の調査資料を再検討するなかで得た成果は正式な報告書(李編2015)を作成することによって、専門家の間では共有される。しかし、せっかくの成果を専門家の間で共有するだけでなく、地元の方々とも成果を共有する場を設けたいと考え、茨木市立文化財資料館で展示をおこなうことにした。

方法 この展示の枠は前述の2つの展示とは異なり、資料館のロビーを用いた、非常に小さい展示であり、従来は所蔵資料を紹介するのが目的であった。そのため、展示スペースが限られており、かつ予算の都合上、自前の梱包輸送しか適わなかったことから、展示する実物資料は須恵器のみの展示とした。しかし、上寺山古墳の資料は一般公開されたことがなかったため、須恵器のみとはいえ、初めての里帰り展ともなった。

また、調査当時のカラーズライドおよび図面をパネルで展示することができた。カラーズライドも今まで公開されたことがなく、貴重な調査当時の風景や、調査方法の検討、さらには堆積などの再検討が来館者にもできるようになった。また、調査図面には、出土した須恵器のなかに似顔絵、墓壙の断面に小さく「クリームパン」と書いてあるなど、12日間の短く余裕がなかったと考えられる調査期間のなかで、調査参加者のユーモアも窺い知れるものであった。

また、展示期間中、上寺山古墳研究会のメンバーを講師として招き、シンポジウムを開催した。最新の成果を聞けるということもあってか、遠方からの参加者も多く、文化財資料館で開催したイベントでは、最多となる参加者数となった。

まとめ 今回、上寺山古墳の資料とその最新の成果を展示することで、従来の所蔵資料を紹介するだけの企画展とは異なり、学術的な意義をもたせた展示にすることができた。

その結果、専門家も関心をもつ一方で、一般の利用者にとっても、地元でもあまり知られていなかった上寺山古墳の存在を知り、かつ最新の情報に触れる機会を提供

することができた。

### 3.4. 小結

以上、筆者が担当した展示を紹介してきた。共通する点は、必ず新出の情報を盛り込むとともに、その情報によって地域の歴史が明らかになる点を理解してもらえるよう心がけた点である。

全てが成功例とはいいがたいかもしれないが、地域資料の掘り起こしや調査・研究などに基づいた新出情報は、展示に少なからず独自性や目新しさを与えてくれたと考えている。

## 4. おわりに

小さな地域博物館の魅力について、筆者の考え、さらにはこの考えを意識しておこなった茨木市立文化財資料館での展示の試みを紹介した。端的にまとめると、地域資料の徹底的な調査・研究につきる。調査・研究の成果を活かし、魅力的なテーマ設定や適切なストーリーのもとにおこなう情報発信は独創性・目新しさをもち、魅力的であるし、その成果の積み重ねは博物館の魅力をより高めていく。本稿の主張は目新しい点は一切なく、博物館業務の基本とも言える。

小規模な地域博物館の魅力とは何かという問いへの回答は、博物館や学芸員によって様々であろう。地域に根ざした博物館であることから地域社会とのより密接な連携や交流の場の確保、市町村立の博物館が多いことから小中学校との連携、近隣の博物館との連携など。一方、学芸員の数が少ないなか、雑多な業務をこなさなければならぬ小規模な博物館で働く学芸員にとって、新たな館の魅力創出のために使える時間は限られている。この場合、多くの業務をこなすよりも、事業の取捨選択をおこない、博物館の基本である調査・研究に立ち返ることも一つの方策と考える。

最後に、今後の文化財資料館の目指す方向について私見を述べて、本稿を終えることにしたい。

ここまで考古資料の事例を中心に述べてきたが、茨木市立文化財資料館では近年、文献史料を専門とする学芸員が配属され、来年度は美術工芸を専門とする学芸員が採用される予定である。そのため、複数分野の資料(考古資料、文献史料、美術工芸品)からの調査・研究に基づいた地域の歴史叙述とその発信を目指したいと考えて

いる。

そのテーマは、考古学、文献史料、美術工芸、地理学など様々な分野で協業できることから、茨木市北部の竜王山を中心とした山の信仰を考えている。その布石として、今年度、「龍王山をめぐる信仰と人々－山岳寺院の

軌跡－」と題した展示を開催した（清水・高橋 2015）。展示期間中、入館者も多く、利用者にとっても魅力的なテーマであるという手応えを得ており、茨木市立文化財資料館の次なる目標として進めていきたい。

#### 【註】

- (1) この場合、モノでなく、データでも構わないと考える。具体例としては、小樽市総合博物館が実施している、祭りの出店の統計の調査データなどが挙げられる。
- (2) 付け加えておくと、一般の利用者の関心が得られないからといって、基礎的な研究が不要であるわけではない。当然ながら、地域の資料の基礎的研究等は博物館において蓄積していくべき研究である。ただ、資料と利用者を結ぶ際には、どのような研究が必要なのかという点は意識する必要があるというのが本論の趣旨である。
- (3) 調査・研究に加え、その見せ方・伝え方も重要である。しかし、これは調査・研究があつてこそのものであり、本稿では博物館の魅力となると考える調査・研究にのみ言及し、見せ方・伝え方については省略している。
- (4) 本稿で採り上げなかった茨木市立文化財資料館の他の現状については、本誌第 25 号に黒須靖之によってまとめられている（黒須 2011）。筆者が働く以前であるが、併せて参照されたい。
- (5) 当然ながら、考古資料以外の史資料の活用も文化財資料館の果たすべき役割であり、今後の課題でもある。文献史料の活用については、本誌別論文で高橋伸拓が述べている。
- (6) 焼成煉瓦のこと。

#### 参考文献（五十音順）

- 黒沢浩 2014 「博物館学芸員の役割」『考古学研究 60 の論点』考古学研究会
- 黒須靖之 2011 「地域密着型博物館類似施設と学芸員観」『Musa』第 25 号 追手門学院大学博物館研究室
- 清水邦彦 2013 『東奈良遺跡の青銅器鑄造』茨木市立文化財資料館
- 清水邦彦 2014 『茨木に眠る資料－免山篤コレクションを中心に－』茨木市立文化財資料館
- 清水邦彦・高橋伸拓 2015 『龍王山をめぐる信仰と人々－山岳寺院の軌跡－』茨木市立文化財資料館
- 田代克己 1972 『上寺山古墳発掘調査概要』茨木市教育委員会
- 広瀬和雄 2008 「考古学研究と博物館」『考古学研究』第 55 巻第 1 号 考古学研究会
- 李聖子編 2015 『上寺山古墳の研究』上寺山古墳研究会
- 用田政晴 2014 「博物館学芸員の役割」『考古学研究 60 の論点』考古学研究